



Title	在日コリアン一世の言語運用
Author(s)	金, 智英
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47083
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	金 智 英
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 0 6 6 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	在日コリアン一世の言語運用
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 真 田 信 治 (副査) 教 授 土 岐 哲 助 教授 渋谷 勝 己

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、在日コリアン一世の言語運用に見られる特徴を記述、分析したものである。歴史的な背景のもとで渡日した在日コリアン一世たちは、定着後、生活語として日本語を自然習得した。その日本語は、教室などで文字を介して明示的な文法説明を受けて習得した場合は異なり、周りからのインプットを聴覚的印象によって習得したものであるために、音声や語彙・語法などに特徴的な側面が見られる。それは、意思伝達やその発話効果を最大限にするための機能的な側面に関心が置かれたことばづかいなのである。

本論文での研究対象は、兵庫、大阪、京都に居住する一世、7人である。インタビュー方式による調査を行い、その談話資料から観察される言語特徴の一端を糸口として分析の項目を見出すといった帰納的な方法論を採っている。

まず第1章で、在日コリアン形成に関する歴史的経緯や言語生活的な状況についてまとめ、第2章から第7章において、各項目についての具体的な記述を行っている。そして、最後の第8章では、本論文を総括し、第二言語習得研究の分野で言及される、いわゆる普遍的な傾向といったもののかかわり、自然習得における地域方言の影響、そして母語の継承などについて言及している。以下、第2－7の各章で取り上げられている項目の分析結果の概略を示す。

第2章では一世の発話に見られる指示詞の特徴的な運用に焦点を当てて考察している。特にソ系指示詞、ア系指示詞の運用において、第二言語習得分野の研究で指摘されていることと同様の、母語話者とは異なる法則が存在することを確認している。そしてその心的距離による使い分けのメカニズムを詳細に分析している。

第3章では一世の居住地の遍歴がその言語にどのように影響しているのか、方言形否定辞の「ン」「ヘン」などの運用を中心に否定表現の全体を記述、分析している。結果としては、方言形がその運用に定着していること、個人によっては過去の居住地域の方言がいまなお強く影響を与えていることを明らかにしている。第4章では第3章で扱った否定表現のうち、特徴的な変容を見せている形容詞を改めて対象にして、その運用を詳細に記述し、そこに複雑な活用を回避する単純化傾向や機能語を省略したり付加したりする傾向を確認している。

第5章と第6章では助詞の使用を取り上げている。第5章では格助詞「の」に焦点を当て、「の」の過剰使用や、逆の脱落現象を記述し、その背景にある要因を探った。第6章では場所を表す格助詞「に」と「で」を中心に、その出現実態を探った。そして、第二言語習得分野の研究で指摘されている傾向と同様のものがそこに見られることを明らかにし、また母語の干渉についても触れている。

第7章では談話を分析の単位として、談話の展開といった観点から混合コードの実態を記述している。そして、そ

の中間言語的なコード・スイッチングが一世の談話展開（語り）におけるストラテジーであることを具体的な用例に基づいて検証している。

論文審査の結果の要旨

在日コリアンは、コリアン同士のネットワークを構成している場合が多い。そういった点では言語共同体としての一面を持っているわけである。したがって、在日コリアンたちの言語状況の解明は、日本における移民コミュニティの言語実態研究における重要な課題である。在日コリアン一世たちの日本語は、あくまで日常の言語生活を営むことを目的に習得された「生活語」であり、それは、まさにコミュニケーション能力を重視した習得によるものであった。そしてそれは敬語や表現法における婉曲さといったものや文法的項目の正確な運用といった側面よりも、むしろ意思伝達やその発話効果を最大限にするための機能的な側面に関心が置かれたことばなのである。

在日コリアンを対象とした今までの研究では、アンケート調査によって、その言語使用意識をまとめたものや、言語景観の立場からその状況を描写したものが大部分であった。本論文の特長は、話者の回想談話を対象に、その談話の時間的流れのなかでの表現形式のありようを動的に記述している点にある。それは期せずして、個々の話者がそれぞれに抱え込んでいる生活誌の記述ともなっているのである。一人一人の人間の顔が見えるような研究への志向は、今後の新しい社会言語学的な展開を予測させるもので、高く評価されるところである。

考察対象にした項目の選定がやや恣意的に見える点や、論述のありかたにやや一貫性を欠くところがある点、また、収録音声の文字化の手順にまだ不十分なところが認められる点などはあるが、対象項目に関する実証的な記述と緻密な分析の結果は、第二言語の習得に関する研究、特に中間言語の研究に新鮮な材料を提供して、この分野での研究に貴重な貢献をなすものとなっている。よって、本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。